



【海の状況 (6/16~7/15)】

神子表面水温・6月中旬~下旬および7月中旬は平年より2~3°C程度高め、7月上旬は概ねやや高め(過去30年平均より0.5~1.0°C程度高め)であった(図1)。

米ノ表面水温・6月中旬および7月中旬ははなはだ高め(過去15年平均より1.5~2.0°C程度高め)、6月下旬~7月上旬は概ね平年並み(過去15年平均より±0.5°C程度)からやや高め(過去15年平均より0.5~1.0°C程度高め)で推移していた(図2)。

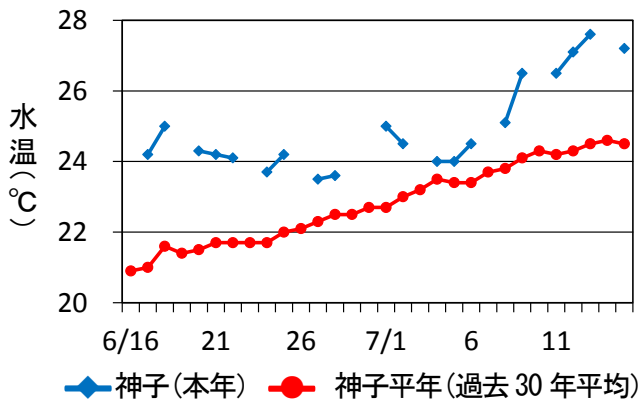


図1. 若狭町神子地先における表面水温の推移

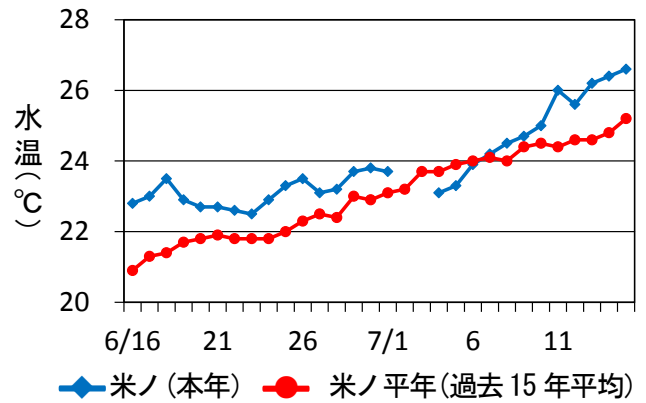


図2. 越前町米ノ地先における表面水温の推移

100m深水温・2013年7月上旬の若狭湾沿岸域は、昨年同時期と同様に14~15°C台の水域が広がっていた。
※水温分布図は紙面の都合上、割愛させていただきます。詳しくは日本海区水産研究所ホームページ (<http://jsnfri.fra.affrc.go.jp/Physical/sokuho.html>) よりご確認ください。

流れ・水温・波高 (リアルタイム) 情報提供を再開しました

不具合により停止しておりました、流れ・水温・波高 (リアルタイム) 情報提供を再開いたしました。ご不便をおかけいたしました。今後とも日頃の操業に活用していただければ幸いです。情報は福井県水産試験場のホームページ (<http://www.fklab.fukui.fukui.jp/ss/>) から見ることができます。



写真: リアルタイムブイ



QR コード

平成 25 年度 スルメイカ漁場一斉調査結果

7月8~12日にかけて4泊5日の日程で、右図のとおり福井県沖においてスルメイカ漁場一斉調査を行いましたのでその結果をお知らせいたします。釣獲調査は20:00~4:00の8時間、イカ釣り機を6台用いて行いました。調査を行った4定点の総釣獲尾数は1,662尾(前年:1,884尾、過去5年平均:2,348尾)でした。また、各調査定点における釣獲尾数は図中に示したとおりです。

なお、日本海側各県の釣獲調査結果等をもとにした第2回スルメイカ長期漁況予報がプレスリリースされております。詳細は(独)水産総合研究センターのホームページ (<http://www.fra.affrc.go.jp/>) から見ることができます。

(宮田克士)

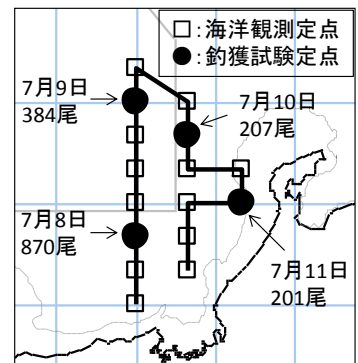


図 調査定点および各釣獲調査定点での釣獲尾数

〔県内の漁模様：6月〕

2013年6月における県内の総漁獲量は1,132tで、昨年同月を28t上回った。

定置網

漁獲量は748tで、アジ類、サバ類、トビウオ等の魚種を中心に前年同月を103t下回った。一方、ブリ類（ブリ、ツバス銘柄）、サワラ、ケンサキイカ等は前年同月を上回った。

底びき網

漁獲量は52tで、概ね前年並みの漁獲量であった。

釣り・その他

漁獲量は333tで、スルメイカ、ケンサキイカ等の魚種を中心に前年同月を128t上回った。一方、アマダイ等は前年同月を下回った。

(単位：kg)

定 置 網			
魚 種	2013年	2012年	03-12平均
マイワシ	2,070	86	41
カタクチイワシ	13,707	12,310	10,882
アジ類	157,103	195,943	429,701
（アジ）	99,530	128,301	242,303
（小アジ）	53,834	64,769	181,153
（アオアジ）	3,739	2,873	6,245
サバ類	18,807	123,785	60,947
（サバ）	3,453	123,602	57,581
（ピンサバ）	15,354	182	3,366
ブリ類	276,952	112,393	238,329
（ブリ）	151,034	10,857	49,110
（ワラサ）	11,296	11,366	26,998
（ハマチ）	19,559	30,923	71,229
（ツバス）	95,020	59,082	90,859
ヒラマサ	2,615	4,047	1,084
シイラ	3,904	4,963	944
サワラ	70,831	39,211	61,306
トビウオ	120,795	273,425	177,088
マダイ	5,155	12,362	13,095
スズキ	6,833	6,432	6,399
ヒラメ	910	1,159	1,523
カマス	5,622	11,493	6,685
フグ類	3,657	5,047	16,413
スルメイカ	17,829	16,030	12,582
ケンサキイカ	14,716	5,947	18,790
合 計	747,532	850,834	1,098,581

底 び き 網			
魚 種	2013年	2012年	03-12平均
キダイ	1,371	666	545
アカガレイ	4,571	2,038	2,150
その他カレイ	1,712	1,153	1,331
アカエビ	33,509	34,663	39,132
その他エビ	4,521	4,349	3,508
合 計	51,513	47,460	53,517

釣 り、 延 縄、 さ し 網、 そ の 他			
魚 種	2013年	2012年	03-12平均
アジ類	817	756	784
ブリ類	3,382	871	3,701
マダイ	3,143	2,946	4,168
キダイ	8,110	6,461	4,974
アマダイ	3,670	5,180	5,914
スズキ	4,082	4,753	5,989
ヒラメ	1,292	1,989	3,414
その他カレイ	3,515	2,315	3,886
アナゴ	3,864	3,593	4,275
メバル類	6,208	6,043	4,904
スルメイカ	162,531	44,902	220,327
ケンサキイカ	3,159	306	2,603
タコ類	43,926	42,748	37,957
合 計	333,234	205,725	408,270

総 計	2013年	2012年	03-12平均
	1,132,279	1,104,019	1,560,368

※（ ）は銘柄別の漁獲量、その他カレイはアカガレイ以外のカレイ類、その他エビはアカエビ以外のエビ類

〔近隣府県の漁模様〕

(漁獲状況……石川県；6月の定置網の1日あたりの漁獲量。京都府；6月のJF京都漁連舞鶴地方卸売市場へ水揚げされた定置網の1日あたりの漁獲量。兵庫県；6月中旬～7月上旬の余部定置網の1日あたりの漁獲量。鳥取県；6月中旬～7月上旬の1統あたりの漁獲量。)

石川県……定置網……マアジ12.2t、ブリ（ブリ銘柄）5.7t、トビウオ5.3t、カタクチイワシ4.4t、スルメイカ4.1t、マサバ4.2t、サワラ・サゴシ3.4t。

京都府……定置網……カタクチイワシ13.7t、マアジ3.0t、ブリ（ブリ・マルゴ銘柄）1.0t、ブリ（ハマチ・ツバス銘柄）0.9t、サワラ・サゴシ0.4t。

兵庫県……定置網……シロイカ（ケンサキイカ）507kg、アジ207kg、トビウオ155kg、ツバス93kg、スズキ61kg。

鳥取県……まき網……マアジ24.7t、ウルメイワシ0.4t、マイワシ0.2t、マサバ0.2t。

(宮田克士)

固定式刺網に関する標本船（操業日誌）調査から

固定式刺網は、多種多様な魚を漁獲できる漁法で、本県でも幅広く営まれていますが、魚を刺したり絡めて獲るため魚体を傷めやすく、漁獲物・ゴミ外し作業等、漁労以外の作業負担の多い漁法でもあります。そこで、県では平成23年度から、この漁法での資源の有効利用や作業面の負担軽減のための、刺網に関する調査を実施しています。

この調査の一環として、平成23年12月～平成24年11月の1年間、あわら市を除く沿海10市町、23隻の刺網漁業者の協力を得て標本船調査を実施しました。その結果から、漁具の使用状況と網処理作業量について報告します。

使用されている漁具は一枚網と三枚網ですが、標本船23隻中、三枚網だけ使用が16隻、三枚網と一枚網の併用が5隻、一枚網だけ使用が2隻であり、さらに、標本船が使用した網の長さの総量でみた場合、一枚網の割合は6%程度でした。一枚網の使用頻度が三枚網に比べて少ないのは、漁獲対象が三枚網に比べて限定的で、使用機会が限られているためと考えられました。

調査期間中における網の設置時間は、一枚網では、午後に投網して、翌日の午前中に揚網するパターンが県全体で見られました。

三枚網では、嶺北地区は夏季にやや短くなるものの年間を通じて、網を入れた翌日に網揚げする1日設置であるのに対して、嶺南地区は12月から翌年4月までが網入れ2日後に網揚げする2日設置、5月から11月までは1日設置になり、年間で網設置時間が大きく変動していました(図1)。

両地区ともに、水温が高い時期に網の設置時間が短くなっているのは、漁獲物の品質低下が相対的に激しくなることへの対策と考えられました。

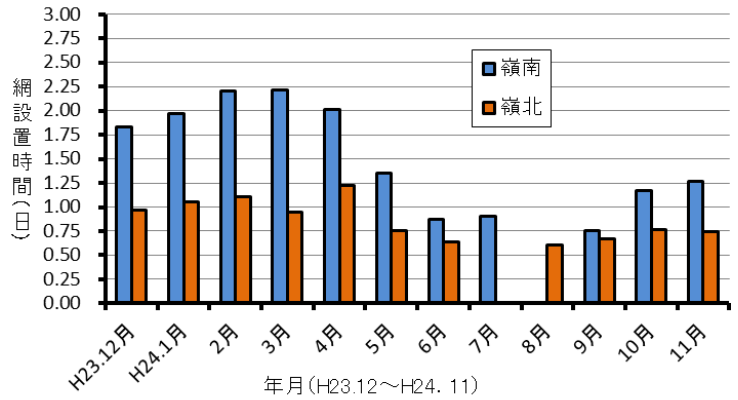


図1 地区別月別の三枚網設置時間

図2および図3に、三枚網について、一操業あたりの網長と網処理作業量の関係を示しました。

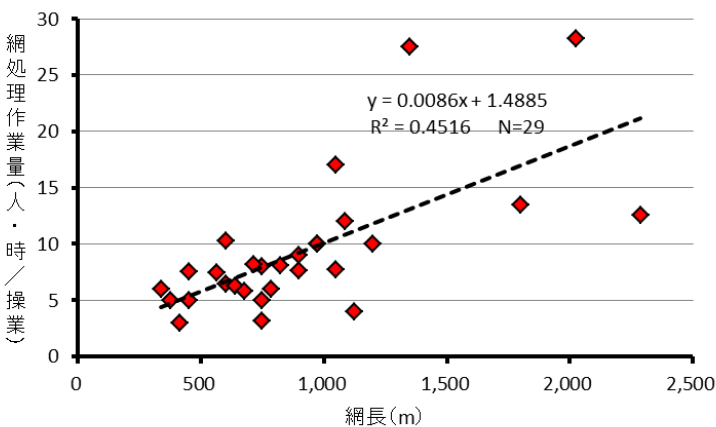


図2 嶺北地区の三枚網と網処理作業量

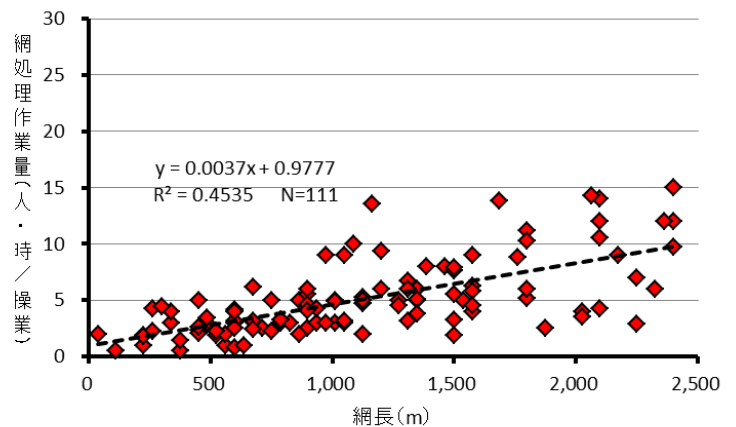


図3 嶺南地区の三枚網と網処理作業量

嶺北地区と嶺南地区では網処理作業量に違いがみられました。たとえば、1000mの網を処理する作業量は、嶺南地区では、5人・時程度でしたが、嶺北地区では嶺南のほぼ倍の10人・時の作業量を要していたとの結果を得ました。ゴミ量等の多寡が影響していると考えられましたが、さらに分析を進めていきたいと思っています。

(渥美正廣)

バフンウニ種苗生産技術の改良

これまでのバフンウニの種苗生産技術には、次のような残された問題点がありました。

1. 稚ウニ採苗後の大量死の問題

ひとつは採苗後2～3週目の稚ウニの大量斃死で、これが発生すると何千枚という量の波板洗浄をしなければなりません。この作業には大変な労力が必要となるため、大量斃死を防ぐ方法を検討しました。稚ウニへの変態と着底効率を上げるため、採苗水槽には網袋に入れた有節石灰藻を吊しますが、これを吊す時期を従来よりも2～3日遅らすことによって大量斃死を防ぐことができました。有節石灰藻の変態・着底促進効果は極めて強いことが判ってきましたので、まだ変態できるまでに育っていない幼生までをも無理矢理に変態させてしまうと考えたからです（例えば、人間の早産のように）。

2. ウニ幼生の移槽時における着底率低下の問題

次に、浮遊幼生を飼育している1トン水槽から5トンの採苗水槽への幼生の移槽方法をサイホン式に変えたところ、着底率が増加しました。これまではネットで幼生を濾してバケツリレーで移槽していましたが、その方法ではネットで幼生が擦れて傷つくことにより弱ってしまうと推察されました。



写真1 ウニ漁獲風景

3. 餌となるアオサの確保の問題

最後に、波板から剥離した稚ウニの餌には生のアオサが必要となります。11月に採卵すると、5月の月上旬からアオサが必要となります。しかし、現在培養しているアオサは冬期になると枯れてしまうといわれてきた種類であるため、これまでの越冬方法は室内で加温して少量の種（たね）を維持培養してきました。この種（たね）を用いて、4月中旬から屋外水槽で拡大培養を開始すると、餌として供給できるようになるのは6月中旬でした。この間の餌は海から天然のアオサ等を採集し、淡水で雑生物を洗い流してから供給していました。この大変な労力を削減するために、屋外水槽で大量の種（たね）を自然海水の水温で越冬させてみたところ、3水槽のうち1水槽の確率で大量の種（たね）を越冬させることができました。この方法によって、5月上旬から餌として供給できるようになり、天然の海藻を採集する必要がなくなりました。



写真2 カゴ飼育中の稚ウニとアオサ

今後もさらなる労力の削減に努力したいと思っています。

(日比野憲治)